

かりがねや生死はいつも湯が滾り

藤田湘子

高知に住んでいるため名前は知っていてもほとんど見る機会がないのが、日本に冬鳥として飛翔する「雁かりがね」である。モノクロ映画や小説で、その飛翔姿や隊列に思いを寄せることはあっても、身近に姿を見たり鳴声を聞いていないと確かなイメージは頭ち上がってこない。

湘子先生が育った小田原や関東では、昔は見る機会が多かったかもしれないが、今や絶滅危惧類である。

人の生き死に関わるのは重大事。その最中に、無くてはならないのが、産湯と湯灌の「湯」である。そして、その湯を沸かすのは、一昔前までなら家族や親族、隣近所の人達の大切な役割であったのだろう。しかし、今ではほとんど他人が務めるようになってしまった。

1985年（60.10.31作）第八句集『黒』 鑑賞・轍郁摩